

資料が多数見つかった。偶然の五山は私の夫の祖父、つまり義理の祖父に当たったこととは思えない。

私の後継者

江夏豊

大阪学院は野球部の強化に熱心ではなく、グラウンドも狭かった。左翼が70、80呎、右翼が60呎くらいしかとれず、しかも月水金が野球部、火木土がサッカーというように使い分けていた。

真っすぐだけ「独り相撲」

投手の基本動作教わらず

か 球 四

塩釜強先生、愛称ガマさんという監督も野球経験のない素人だった。鹿児島の子種子島出身で人物は豪快そのもの。「野球は根性や。相手のピッチャーと一対一のサシでけんかするつもりでやれ」という指導で、技術は一度も教えてくれなかった。

おかげで投手としての基本動作もできないまま、投げ続ける羽目になった。けん制、バント処理、三塁や本塁のベ



塩釜監督は豪快そのものだった。見たことのないカーブは高校生で打てるものではなかった。あんなカーブを自分も投げたいと思い、職員室を訪ね、「監督、カーブの投げ方を教えてください。次の瞬間、振り向いたガマさんのグーパンチで、吹っ飛ばされていた。

野球どころの関西。同世代にプロに入るような連中がごろごろいて、刺激の材料に事欠かなかつた。大阪にはPL学園の福嶋久晃（大洋へ、以下球団名は当時）、加藤秀司（阪急へ）、大鉄の福本豊（同）。東の奈良には天理の門田博光

角、浪商とあたった。ヒットはほとんど打たれなかつた。しかし四球、二盗、三塁への送りバント、スクイズというお決まりのパターンで失点、2-4で敗れた。けん制も何もできないのだから、やられて当然だった。大阪大会は日生や藤井寺など、開催球場ごとに4つのブロックに分かれ、大阪北部の吹田市にあった大阪学院は松下球場を会場とするブロックに入っていた。毎年3回戦までに浪商などの強豪校に当たる仕組みだった。先輩たちが跳ね返されてきた壁は厚かった。それでも2年の夏には2回戦で浪商を破り、準々決勝まで進んだ。打者としても、両翼99呎と当時としては広かった球場でホームランを放った。



の紙芝居を世に出した。作品は「赤頭巾ちゃん」。五山は1歳半で母を亡く算して、「急にめくる」一部の作品は版を重ね、紙芝居の絵をめぐる際、次の絵につながるよう計り、「ピーター兔」など一部の作品は版を重ね、